

日本語母語話者と韓国語を母語とする学習者の 日本語の同意を示すあいづち

——ディスカッションにおけるあいづち使用の比較——

松 崎 千香子

Aizuchi ('conversation smoothers') Used in Discussions:
Differences between Native Japanese and Korean-Speaking Learners

MATSUZAKI Chikako

Abstract : In this paper, I investigate two kinds of concordant *aizuchi* ('conversation smoothers'), as I examine the differences between native speakers of Japanese and Korean learners of Japanese in the frequency of use of these two kinds of *aizuchi* in discussions. The results can be summarized as follows:

- (1) Native Japanese listeners use concordant *aizuchi* to show agreement with facts and examples given by the speaker to support the speaker's opinion even when the listener disagrees with the content of the opinion itself. This kind of listener's behavior helps create a comfortable environment in which the speaker can state her/his opinion.
- (2) In contrast, Korean learners of Japanese use concordant *aizuchi* more when the speaker gives facts and examples that support the listener's opinion to confirm the validity of his/her opinion.

The above differences in the decision mechanisms for the use of *aizuchi* can cause some trouble in communication between native Japanese and Korean speaking learners.

要旨：聞き手によって使用されるあいづちは、コミュニケーションを円滑にする働きを担っているが、非母語話者のあいづちは、母語話者とは異なった使用がなされる場合も多い。本稿では、日本語母語話者と韓国語を母語とする日本語学習者を対象として、日本語でのディスカッションにおける「同意を示すあいづち」の使用の相違とその要因を考察した。

その結果、この種のあいづちの出現傾向において、日本語母語話者の場合は「自分と同じ意見を持つ話し手の発話」よりも「自分とは異なる意見を含む話し手の発話」の中で出現する割合が高かった一方で、韓国語母語話者の場合はそれとは逆の傾向が見られた。日本語母語話者は、話し手が聞き手の主張にとって不利になる事実、または話し手の主張を支持すると思われる事実を述べる時、それに対して同意を示すあいづちをうち、会話に参加する積極的な態度を示すなどして、話し手が意見を述べやすい雰囲気作りをするよう配慮していることが伺える。一方、韓国語を母語とする学習者は、話し手が自分の主張にとって有利になる事実を述べる時、それに対して同意を示すあいづちを用いることによって、自分の主張の妥当性を訴えようとしていると考えられる。韓国語母語話者の母語文化では、ディスカッションの場で「自分とは異なる事実・意見を含む話し手の発話」に対して同意を示すあいづちを打つことは相手に優柔不断な印象を与えるために、日本語においてもそれを回避するために使用を避けたものと考えられ、このような態度が日本語でのコミュニケーション上の問題となる可能性が示唆された。

1. 序 論

コミュニケーションは、話し手と聞き手双方の協働によって成立する。近年、非母語話者に対する日本語の音声コミュニケーション教育の中では、話し手としてだけでなく、聞き手としての役割をも十分に果たせるよう指導する必要性が認識されている。この流れの中、日本語学習者を対象としたあいづちに関する研究が行われてきた(堀口, 1990; 渡辺, 1993; 向井, 1998; 窪田, 2000など)。

この中で、渡辺(1993)は、学習者の場合はハイ、エエ、ウンなどの「促進型」のあいづちと、ソウデスカ、ナルホドなどの「完結型」のあいづちの区別がつかないために、完結型を用いるべきところで促進型を用いるケース、またその逆のケースがあるという質の面からの問題点を挙げている。さらに、向井(1998)は、学習者はあいづちを使用するとき、単に「聞いている」「理解した」ことを示すにとどまる傾向があるのに対し、日本語母語話者は、「聞き手としてどう感じるか」という話し手に対する態度を示す傾向があることを指摘している。

しかし、他の先行研究の多くは、学習者が用いるあいづちの使用頻度や表現形式等に関する実態調査にとどまっている。使用頻度に注目することも重要であるが、あいづちが話し手に配慮しながら行うコミュニケーション行動において果たす役割を考えると、どのような場面でどのようなあいづちを用いるかといった機能・質を追求していく必要性も高いと思われる。

本稿では、このあいづちの機能に注目し、ディスカッションの場で用いられるあいづちについて考察する。ディスカッションでは、自分とは異なる意見を持った聞き手に対する話し手としての配慮、ならびに、話し手から聞き手に立場が変わったときの話し手に対する配慮が要求される。メイナード(1993)が、「あいづちが会話に使われる根本的な理由は、会話相手に対する意識、ひいては『思いやり』という当事者間の心理的・感情的なふれあいに求めなければなるまい」(p. 160)と述べているように、ディスカッションにおいては円滑なコミュニケーションを行うための一助として、そして、円満な人間関係を築き、維持するものとして、話し手に対する配慮を示す聞き手の適切かつ有効なあいづちが不可欠である。

2. 目 的

聞き手は、あいづちを用いて、どのような形で話し手に配慮しているのだろうか。本稿では、日本語母語話者と、韓国語を母語とする日本語学習者を調査対象として、ディスカッションという自分と異なる意見を持つ相手との会話の場でのあいづちの使用について見ていく。

本稿では、堀口(1997)の定義に基づき、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」とする。堀口(1988)によると、あいづちの機能は次のようなものである。

- ①聞いているという信号
- ②わかったという信号
- ③同意の信号
- ④否定の信号
- ⑤感情の表出

このような機能を持ったあいづちを使用して聞き手が積極的に会話に参加することは、話しやすい環境を作り、コミュニケーションを促進する。

また、あいづちの言語形式には、「ハイ」「エー」「ソウ」などのあいづち詞と呼ばれる形式や、その繰り返しである「ハイハイ」「ソウソウソウ」、直前の相手の発話の一部または全部の繰り返し、他の語句による言い換え、話し手の話の先取りなどが挙げられる。

本稿では、多くのあいづちの中から、「同意を示すあいづち」を取り上げる。これを取り上げたのは、日本語でのコミュニケーションを観察すると、自分と同意を持つ話し手の発話に対してだけでなく、自分とは違う意見を持つ話し手の発話中にも「エエ」「ソウデスネ」などが用いられることも多いことが分かるため、日本語に特徴的なあいづちと考えられるからである。これが日本語学習者でも同じように用いられているのだろうか。

本稿では、韓国語を母語とする日本語学習者が同意を示すあいづちを、特に「自分の意見に不同意である話し手の発話」に対して、どのように用いているか、それが日本語母語話者の用い方とどのような点で異なっているかを明らかにして、その違いが異文化間コミュニケーションに及ぼす影響を考察する。

3. 方法

(1) 調査対象者

日本語母語話者（以下、J）女性8名、韓国語を母語とする日本語学習者（以下、K）女性8名であった。性別を統一したのは、待遇上の問題を避けるためである。Jの年齢分布は25歳から30歳で、全て日本の大学院（博士課程後期）に在籍する者であった。Kの年齢分布は27歳から31歳までで、出身は6名がソウル、2名が釜山であった。Kは全て日本の大学院に在籍していた。全てのKのバックグラウンドをTable 1に示す。

(2) 手続き

調査対象者は、2回のディスカッションを行った。1回目は、母語が同じ相手とのディスカッション、2回目は母語が異なる相手とのディスカッションであった。ディスカッションは相手が初対面になるよう、かつ、できるだけ相手との年齢差が小さくなるようペアリングを行った。

「自分の意見に不同意である話し手の発話」に対してうたれるあいづちを調べるため、両者が対立する意見を持つようにロールプレイ方式で行った。ディスカッションに用いたロール（立場）をTable 2に示す。

ディスカッションの収録は防音室で行った。対話者が向かい合わせになるよう椅子を配置し、その間に背の低い花瓶などを載せた机を設置した。ICレコーダーを調査対象者が対話中に気にすることがないように、机の上の目につかない位置に設置し収録した。

調査対象者二人ずつに収録室に集ってもらい、各々にロールカードを渡し、それに示したロール（立場）に立って、相手とディスカッションするように指示した。このとき、あいづちに関する調査の目的は知らせなかった。また、調査対象者には、年齢は互いに知らせあわないこと、韓国語母語話者同士のディスカ

ッションも全て日本語で行うことを要請し、韓国語で話された場合は、これを分析対象から除外した。2回目のディスカッションも同様の手順で行い、ディスカッション終了後に調査の目的を知らせた。

収録されたディスカッションの音声文字化したものを分析資料とした。ディスカッションは合計16回行われ、1回のディスカッションは最も短いもので4分18秒、最も長いもので8分08秒であった。総収録時間は、約108分であった。

(3) 分析対象

ディスカッションでは多くのあいづちが出現した。参考として、Table 3に調査対象者の母語別の平均あいづち間拍数を掲げる。Table 3から、日本語母語話者は韓国語母語話者よりもあいづちを使用する頻度が高いことが分かる。また、李（2001）の男性を対象とした調査と比べると、日本語母語話者、韓国語母語話者ともにあいづちが多いことがわかる。

発話データに表れたあいづちから、「同意を示すあいづち」を前後の文脈と共にとりあげ、分析の対象と

Table 2 調査対象者に示したロール

ディスカッション1	A: 女性が結婚したあとも仕事を持つ・続けるのが良い。(1A)
	B: 女性が結婚したあとも仕事を持つ・続けるのは良くない。(1B)
ディスカッション2	A: 日本では、外国人は日本人のように言動するのが良い。(2A)
	B: 日本であっても、外国人は日本人のように言動する必要はない。(2B)

Table 3 日本語母語話者と韓国語母語話者の平均あいづち間拍数

話し手	日本語母語話者		韓国語母語話者	
	日本語母語話者	韓国語母語話者	日本語母語話者	韓国語母語話者
平均あいづち間拍数	24.6	25.5	37.6	38.7

Table 1 韓国語を母語とする日本語学習者のバックグラウンド

	年齢	日本語学習歴	日本滞在期間	出身地	専攻
K1	31	10年	5年7ヶ月	ソウル	日本文学
K2	31	10年8ヶ月	6年7ヶ月	ソウル	日本語学
K3	27	4年2ヶ月	1年2ヶ月	ソウル	経済学
K4	28	6年8ヶ月	1年2ヶ月	ソウル	工学
K5	28	5年	3年7ヶ月	ソウル	経済学
K6	29	7年8ヶ月	3年2ヶ月	ソウル	日本語学
K7	27	7年1ヶ月	2年6ヶ月	釜山	日本語学
K8	29	9年	5年8ヶ月	釜山	国際学

した。

か否かを判断した。

4. 結 果

調査で得られた同意を示すあいづちがどのような内容の発話中に用いられているかを、次の3つに分類してまとめる。

- ア. 自分の意見に不同意の内容の発話²⁾
- イ. 自分の意見に同意の内容の発話³⁾
- ウ. ア・イのいずれとも言えない内容の発話

この同意を示すあいづちには、「ソウデスネ」「ナルホド」「ソウ」等だけでなく、「ア ソウデスネ」「ア ヤッパリ」のような複合した型のあいづち、及び先取りあいづちも含まれる。但し、「ソウデスネ」のように、形式的には同意を示すものであっても、イントネーションやスピードによって否定的な意味となるあいづちは、そのプロソディを参考にして、同意を示す

(1) 日本語母語話者の同意を示すあいづち

日本語母語話者の同意を示すあいづちを話し手の発話内容ごとに Table 4 に示す。Table 4 から分かるように、日本語母語話者の場合は、相手の母語に関わらず、自分の意見に同意の内容の発話に対してよりも、自分の意見に不同意の内容の発話に対して、より多くの同意を示すあいづちを使用していた。調査対象者別に見ても、日本語母語話者全員にこの結果が当てはまるため、これを日本語母語話者の同意を示すあいづち使用の傾向として認めることができる。

具体的なあいづちの使用例を例 1 に挙げる。このディスカッションでは、J3 は女性は結婚したあとも仕事を続けたほうが良いという立場に立っており、J4 の子供ができたなら家にいてあげなければならないとする発話内容は、J3 にとっては自分の主張に不利なものである。ここでの「ア ソウデスヨネ」は、その不利になる事実を認めているものと解釈できる。

Table 4 日本語母語話者の同意を示すあいづちの使用

話し手の発話内容	対日本語母語話者		対韓国語母語話者	
	使用回数	あいづち	使用回数	あいづち
ア. 自分の意見に不同意	24 回	「ソウデスネ」(9) 「ア ソウデスヨネ」(4) 「ソウデスヨネ」(4) 「ソウ」(2) 「アー ヤッパリネ」 「ナルホド」 「アー ソウデスネ」 「ウン ソウデスヨネ」 「アー ソウカ」 (9 種類)	12 回	「ソウデスネ」(3) 「ソウナンデスヨ」(3) 「アー ソウカ」(2) 「ソウ」 「タシカニ ソウ」 「ソウデスヨネ」 「タイセツダトオモウンデスヨネ」 (7 種類)
イ. 自分の意見に同意	5 回	「ソウデスネ」(3) 「ソウ」(2) (2 種類)	4 回	「ソウデスネ」(2) 「ソウ」 「ソウデスヨネ」 (3 種類)
小 計		29 回		16 回
ウ. その他	14 回	「ソウデスネ」(4) など (8 種類)	10 回	「ソウデスネ」(3) など (5 種類)
合 計		43 回		26 回

※あいづち欄の () 内は、そのあいづちが用いられた回数。無表記は 1 回。

例 1) (J3 が 1A のロール, J4 が 1B のロールでのディスカッション)

J3:	女の人 が 仕事したいとか仕事する時間があったらね 仕事するのがいいとおもうんですよー
J4:	エーエー
J3:	うちにいるよりもねー
J4:	アーアー ウン あ そ そうかもしれないですけど でも やっぱり 子供が
J3:	ア ソウデスヨネ ウン
J4:	できたら やっぱり あの 母親は子供のところに あの いてあげないと… (略) …

また、例2に挙げたものは韓国語母語話者とのディスカッションであるが、女性は結婚しても仕事を持つべきという立場に立つJ7は、それと対立する立場のK7に対して、「ソウデスネ」という同意を示すあいづちをうっている。このようにあいづちを用いることで、相手の主張を支持する事実を認め、円滑にコミュニケーションを進め、円満な人間関係を築くための聞き手としての役割を果たそうとしているものと捉えられる。

(2) 韓国語母語話者の同意を示すあいづち

韓国語母語話者の場合は、ディスカッションの相手が日本語母語話者の時と韓国語母語話者の時とで、あいづちの使用頻度、使用されるあいづちの種類などに差が見られなかったため、話し手の発話の内容別に同意を示すあいづちを Table 5 にまとめた。

韓国語母語話者の場合は、日本語母語話者の場合と対照的に、自分に不同意の内容の発話に対してよりも、自分に同意の内容の発話に対して同意を示すあいづち

づちを多く用いることが判明した。調査対象者別に見ると、1名を除く7名にこの結果が見られたため、これも韓国語母語話者の傾向と考えられる。

Table 5 韓国語母語話者の同意を示すあいづちの使用

話し手の発話内容	使用回数	あいづち
ア. 自分の意見に不同意	8回	「ソウデスネ」(3) 「ソウデスヨネ」(2) 「ソウ」(2) 「ダイジデスヨネ」 (4種類)
イ. 自分の意見に同意	19回	「ソウデスネ」(8) 「ソウ」(5) 「アー ナルホドー」(3) 「ソウデショウネ」(2) 「ソウデショウ」 (5種類)
小計	27回	
ウ. その他	14回	「ソウ」(5) など(5種類)
合計	41回	

※あいづち欄の()内は、そのあいづちが用いられた回数。無表記は1回。

例2) (K7が1Bのロール, J7が1Aのロールでのディスカッション)

K7:	あの でも その一 日本では家庭を守るっていいますよね とうか 家族のこと一番に考えてって
J7:	エーエー
K7:	いうのも 一つの生き方とうか 頑張っていくって言うか 専念する 価値があると
J7:	ウン ウンウン
K7:	思うんですよ だから 仕事ってそういう意味では その次の2番目かなって
J7:	エー ソウデスネ… (略) …

例3) (J5が1Aのロール, K5が1Bのロールでのディスカッション)

J5:	私も J5さんの意見に賛成 あの 女性が社会っていうか 会社とかで上にまでいけないっていうのは
K5:	ウン
J5:	あのほんとにそう思います なんですけど 最近多いでしょ 子供が 子供が1人で
K5:	ウン
J5:	留守番してて 家に知らない人をいれたりとか 家事とか 事件が起きるっていうのが
K5:	ソウデスネ
J5:	そういう そういうニュースみるとねー でも やっぱ 女性だけが … (略) …
K5:	エー

例4) (K3が1Aのロール, J6が1Bのロールでのディスカッション)

K3:	仕事をしている母親っていうのは 仕事の時間以外 子供とできるだけ過ごそうって考えるんじゃ
J6:	ウン
K3:	ないでしょうか で だから ずっと子供といる人よりも 時間は少ないけど 中身は何倍 ずっと 何倍も
J6:	ウン
K3:	子供のことだけ考えて 時間を過ごす んー過ごせるんじゃないかと思うんですよ… (略) …
J6:	エー まあ ほんと
K3:	たしかに 家にずっといても お母さんもイライラが溜まってしまおうし あの お母さんが子供を
J6:	ハイ ソウデスヨネ
K3:	ストレスのはけ口 はけ口 わかりますか はけ口にするのはだめですよ
J6:	… (略) …

韓国語母語話者によって用いられた同意を示すあいづちの例を例3に挙げる。K5は女性は結婚したあとは仕事を続けるべきでないという立場に立っており、J5が挙げた子供の事故の例はそのK5の主張を支持するものである。そこで、ここでのK5の「ソウデスネ」は、自己の主張に有利である事実を認めて、どれに同意を示すものであると解釈できる。

また、例4では、J6の発話は、仕事を持つ母親の方が、ずっと子供と一緒に過ごす母親よりも子供のかかわりの意味でより濃厚な時間を持ち、その時間を大切に思うことができるというK3の主張を支持する内容である。これに対して、K3が「ソウデスヨネ」とあいづちをうち、K3の意見が妥当であることを相手に伝えようとしているものと考えられる。

5. 考 察

以上の結果より、日本語母語話者と韓国語母語話者とは、ディスカッションで用いる同意を示すあいづちの用い方が大きく異なっていることが判明した。

日本語母語話者は、自分の意見に不同意の発話に対して同意を示すあいづちを多用するが、韓国語母語話者の場合は、自分の意見に不同意の発話に対して同意を示すあいづちを用いることは非常に少なく、日本語母語話者とは逆の用い方をしていた。

このような同意を示すあいづちの使用の違いは、日本語母語話者と韓国語母語話者の、対立する意見に対する態度の違いに起因するものと考えられる。

日本語母語話者の場合は、あいづちを自分とは不同意の発話に対して用いることで、対立する立場であっても、ディスカッションに積極的に参加していることを示すとともに、話し手が話を進めやすいように聞き手としての役割を果たそうとしていると考えられる。まず、人間関係を築き、対立する自分の意見を言うためにも、相手にも意見を言いやすい環境を作るよう心がけていることがわかる。

一方、韓国語母語話者の場合は、対立する意見に対しては同意を示すあいづちはあまり用いることがなく、自分と相手の立場の違いをあいづちの使用によっても明確にしようとする態度が見られる。これは、韓国では、「議論の場において相手の意見に必要以上に同意表明をする人間は優柔不断であるという印象を与える」(李, 2001: 151) ことから、その態度を日本語でのコミュニケーションに持ち込んでいるものと考えられる。

このような日本語母語話者と韓国語母語話者の価値観、及びディスカッションに臨む態度の違いがあいづちの使用に表れたのであろう。

日本語母語話者はあいづちを多用し、また日本語は多くのあいづち表現を持つことが指摘されているが、このような特徴を持つ日本語母語話者と日本語でコミュニケーションを行う際には、適切なときに、適切な機能を有するあいづちを用いなければ、話を聞いていないのではないか、日本語がわかっていないのではないか、などの誤解や不安を招き、コミュニケーションが破綻する可能性もある。

6. 結 語

あいづち表現は、いわゆる意味論的な「意味」を有さないし、また、これまでの日本語の研究、日本語教育研究では情報の発信者としての話し手を研究対象とすることが多く、あいづちの研究、及び非母語話者のあいづちの習得研究については進んでいるとは言えない。しかし、コミュニケーションが話し手と聞き手の共同(協働)のかかわりによって成立することを考えると、あいづちをも含んだ聞き手中心の研究も必要であり、また、その研究の成果をどのように日本語教育のシラバスに組み込んでいくかを考える必要がある。

異文化間コミュニケーションで生じる諸々の問題は、当事者間の文化的背景の違いに起因するコミュニケーション・スタイルの違いであることも多い。

本稿では、コミュニケーション・スタイルの中から、同意を示すあいづちに焦点を絞って研究を行ったが、あいづちには他にも多くの機能がある。また、あいづちの定義は研究者によって異なっているため、日本語教育で扱うべきあいづちの機能についても整理していく必要がある。

注

- 1) 例えば、英語母語話者の場合、英語では聞き手はあまりあいづちをうたずに話を聞くのが通常である。そのあいづちのうち方を日本語でのコミュニケーションにも持ち込んでしまい、話し手である日本語母語話者に「私の話を聞いていないのではないか、理解できていないのではないか」と不安な気持ちにさせることがあるといった量的研究からの示唆がある。
- 2) 自分の意見に不同意の発話は、自分の主張に不利な事実の指摘や、相手の主張を補強する・支持する事実の指摘なども含む。
- 3) 自分の意見に同意する発話は、自分の主張に有利な事実の指摘や、自分の主張を支持する事実の指摘など

も含む。

参考文献

- 喜多壮太郎 1996 「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』, 15(1), 58-66.
- 窪田彩子 2000 「初級日本語学習者のあいづち使用とその習得」平成12年度日本語教育学会 第1回研究集会発表資料.
- 小宮千鶴子 1986 「相づち使用の実態-出現傾向とその周辺」『語学教育研究論叢』, 3, 43-62.
- 李 善雅 2001 「議論の場におけるあいづち：日本語母語話者と韓国人学習者の相違」『世界の日本語教育 日本語教育論集』, 11, 139-152, 国際交流基金日本語国際センター.
- 任 榮哲・李 先敏 1995 「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育 日本語教育論集』, 5, 239-257, 国際交流基金日本語国際センター.
- 堀江 薫 1998 「コミュニケーションにおける言語的・文化的要因-日韓対照言語学の観点から」『日本語学』, 17(11), 118-127.
- 堀口純子 1988 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』, 64, 13-26.
- 堀口純子 1990 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』, 64, 13-26.
- 堀口純子 1997 『日本語教育と会話分析』くろしお出版.
- 松田洋子 1988 「対話の日本語教育学-あいづちに関連して」『日本語学』, 7(13), 59-66.
- 水谷信子 1988 「あいづち論」『日本語学』, 7(13), 4-11.
- 向井千春 1998 「日本語のあいづち-上級日本語学習者と日本語母語話者によるあいづち使用」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 116-121.
- メイナード・K・泉子 1993 『日英語対照研究シリーズ (2) 会話分析』くろしお出版.
- 渡辺美恵子 1993 「日本語学習者のあいづちの分析-電話での会話において使用された言語的あいづち」『日本語教育』, 82, 110-122.
- Maynard, Senko K. 1989 *Japanese Conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.